



函館からトラスト



## 公益信託 函館色彩まちづくり基金 平成15年度助成活動が決定

### 第11回は6件の助成が決定

平成16年2月21日(土)午後4時より函館市末広町にある(株)五島軒に於いて、第20回運営委員会が開催された。平成14年度の助成を受けた5団体のうち4団体の代表者による最終報告及び会計報告がなされた。その後11回目の助成となる平成15年度の助成先とその金額が検討された。それぞれ貴重な活動が申し込まれたが、基金の目的にふさわしいかが論点となった。また単年度にこだわらず時間をかけた活動の持続などを考慮し、金額が決定された。8件の申請に対し6件の助成が決定した。昨年度に引き続き総額150万円の助成となった。

	基金助成団体 代表者	助成希望テーマ	希望金額	助成金額
1	代表者 星野 裕	West Guide & Map 制作プロジェクト	30万円	20万円
2	チャイルドラインはこだて 代表者 小林恵美子	子供が住みやすい街をめざして	50万円	
3	はこだて街なか研究会 代表者 山内一男	地域の魅力情報発信	50万円	20万円
4	ペンキ塗りボランティア隊 代表者 鴨川木綿子	町家ペンキ塗りワークショップ 一空家再生等、他の市民まちづくり活動とのコラボレーションの展開をめざして	30万円	30万円
5	北海道自然エネルギープロジェクト 代表者 ピーターハウレット	「自然エネルギーと市民の触れあい」を求めて	約83万円	
6	函館デザイン協議会 代表者 渡辺譲治	「西部地区の建築絵本」のための研究と資料作成		20万円
7	じろじろ大学出版局 代表者 田村昌弘	じろじろ大学出版事業、準備計画	60万円	50万円
8	ファンナビ編集部 代表者 浦 加奈枝	学生情報誌ファンナビ、ファンナビ web の配信	47万円	10万円
計			約430万円	150万円

からトラストの運営委員というのが、こんなに心地よい仕事だとは思っていませんでした。なにしろ、運営委員会の席上では、この函館のまちづくり活動の風向きとその流れの微妙なところまでよくわかります。その活動の中で生まれてくる新しいうねりを高みから展望していち早く発見できるという、こちらの心がうきうきわくわくする楽しい体験ができます。

そんなことを、函館色彩まちづくり基金助成の選考会や報告会に出る度に感じています。「これまでのこの活動をこう活かしてこれからはこういう段階に進めて行くつもりなんだ…」とか、「この運動からこんなことが生まれて来て、それがこのような効果を出したんだ…」とか、感心することがたくさんあって、つい、申請者や報告者のみなさんと一緒に気持ちで考えたりして、思いがけない刺激を受けています。こんなふうに函館のまちづくり活動のすぐ近くに身を置かせていただいて、時にはその場に参加させてもらいながら、気が付くことは、この町のちょうどいい大きさのことです。行政のやるべき都市の課題を考え

るときにはこの函館市域の大きさが、そしてまちづくりや暮らしを考えるときにはこの西部地区というエリアの大きさが、実にちょうどいいサイズだなあ…と実感しています。まちづくりも、その活動へみんなの目が届く範囲で行われ、その人の姿が見えてこそ、その成果も目の前に残って町を活かす新しいスタイルや形となって行くのでしょうか。それを私は「函館スタイルとか函館型」と秘かに名付けているのですが、たとえば、町家ペンキ塗り活動、町なか宝物探検巡り、地域の楽しみ発見地図作り、そしてじろじろ大学からの提言など、いろいろな地域活動のひとつひとつがこれからの函館を作っていくんですね。

節操なく巨大化したどこの街とは違って、適度に町であり適度に村でもあるこの函館、そして厚みのある歴史のセピア色の時間が染み込んでいる函館、この町の次の時代をつくる場のすぐ近くに居られるうれしさをいつもいつも感じています。

## 西部地区町家体験・まちづくりハウス プラハまちづくり情報センター 柳田良造

「まちづくり運動からまちづくり実践」を基本目標に、昨年度ハウジングアンドコミュニティ財団助成金、函館市まちづくり活動支援事業などの助成をうけ「西部地区町家体験・まちづくりハウス」をテーマに西部地区に元気を取り戻す試みに取り組んだ。具体的活動としては、西部地区の町並み住環境の調査と提

### ●まちづくりワークショップの開催

市民サイドから西部地区のまちづくりや保存再生、地主や住民の空き家、空き地の活用の相談、さまざまな地域の問題等についてまちを歩き、現状を認識し、町並み・住環境の課題、空き家問題等を話し合い、対策を考える連続ワークショップの試みである。

第1回が7月19日の「西部地区の町並み・住環境を点検する」。第2回が8月8日の「西部地区・空き家見学会」。第3回が9月27日の「西部地区・空き家の再生を考える」。ワークショップは全体をとおし

### ●町家群の空き家活用による町家体験ハウスの運用

国内外で活躍するアーティスト等が一定期間滞在し、地域住民との芸術文化交流をすすめる「アーティスト・イン・西部」構想を検討し、拠点確保の方法、運営支援組織のあり方、地域住民との交流の進め方、国際的な連携等に

案のまちづくりワークショップの開催、空き家活用による町家体験ハウスの実践と町家「交流のサロン」の開催、空き家活用相互の情報交流活動、西部地区でのまちづくり事業体としてのまちづくりハウスと空き家バンクの実現化に向けての取り組みを行った。その報告を行いたい。

て、延べ50名ほどの参加があった。

第2回の8月のワークショップでは函館西部地区での夏の恒例行事になっている、町家ペンキ塗り替えボランティア隊の活動や子どもたちの環境学習ワークショップ「じろじろ大学・夏の学校」ともリンクして行われた。また第3回9月の再生提案ワークショップでの成果については、函館市所有の末広分庁舎活用について再生案を2月17日、市の検討委員会の場に自主提案として投げかけている。

ついて検討し、具体策を考えるための試み。これは1,2年前から西部地区の町家や倉庫を活用して、実験的に行なわれてきた活動(はこだて未来大学の「アートハーバー」の試みや、ロッパコの「元町路上ミュージアム」や「民宿芸術」)

を展開し、地域間交流や体験型交流の事業として西部地区に根付かせようとするものである。

具体的には空き家となっていた、以前町家アート活動で活用してことのある元町24-17の町家を約半年間賃貸契約し、町家サロン(元町24-17)として活用することを計画した。次に例年行っているペンキ塗り替えボランティア隊とコラボレーションし、塗り替え対象として選定してもらった。ギャラリーとして活用するため、内部の塗り替えも計画し、ペンキ代は町家体験ハウス側から提供し、労働力はボラン

### ●町家「交流のサロン」の開催

西部地区の町家等を会場にした、街とアート、文化をサロンのような雰囲気でも講師とともに語りあう町家「交流のサロン」の試み。第1回「大木裕之ワークショップ-新しい映像の可能性」を8月16日、はこだて写真図

### ●空き家活用相互の情報交流活動

京都、東京(向島・千住)、北九州などでの長屋、町家等の地域の歴史的ストックの再生・活用に取り組んでいる市民活動の先駆的な試みとの交流。函館西部地区の置かれている状況を客観的に判断する機会を提供するとともに、内外のネットワークを構築し、函館に各地からの地域づくりの体験交流プラットフォーム等が根付いていく土壌を耕す。

この古い町並みでの空き家活用や地域づくりの試みとの情報交流活動としては、9月12日には東京・向島での取り組みの現地調査と、向島学会の山本

ティア隊の力を活用し、8月9、10日に塗り替えを行った。建物の改造完成後、8月16日～9月20日の間、アーティストインレジデンス形式の空き家活用アートイベント「and so on-なつつかいみち はこだて-」を開催した。東京、北九州、札幌、函館、など各地の若手アーティストのネットワークが形成され、滞在型の参加があった。会期中、若手アーティストと地区の住民とも交流が生まれている。

町家サロン7月19日、9月27日のまちづくりワークショップの会場、調査チームの宿泊所としても活用した。

書館1Fスペースで開催。参加者10名。1月31日には、元町の町家改造型店舗のカフェやまじょうを会場に第2回「都市とアート」を青森国際芸術センター館長の浜田剛爾氏を講師に開催した。参加者16名。

俊哉氏へのヒヤリング・意見交換を行った。

1月9日には、京都でNPOとして町家再生に取り組む京町家再生研究会理事長・大谷孝彦氏、事務局長・小島富佐江氏、京町家作事組理事長・梶山秀一郎氏へのヒヤリングを行った。この京都のまちづくりの取り組みとは2月24日に京町家再生研究会事務局長・小島富佐江氏がシンポジウムで来函した機会に、情報交流をおこなった。

12月13日には、東京千住のまちづくりに取り組む市民活動との交流も行った。



### ●活動の成果

今回の活動の成果は、まずなによりも様々な活動のコラボレーションが行われたことがあげられる。

ペンキ塗り換え活動は町並みの整備ということで進めてきた活動で、外壁を塗り替え、町並みを美しく、所有者にも元気になってもらい、建物の維持管理意欲を高めてもら

うことが目的の活動であった。建物の老朽化や人口の減少・高齢化にともない空き家が増え始め、その活用が課題になっている。それに向けたまちづくり活動とのコラボレーションを今年度新しい活動としておこなった。今回は、和風平屋建ての町家の外観だけでなく内部においてもペン

キ塗りを行い、その建物を、20代の若手アーティストによる作品製作と展覧会の会場として、さらに西部地区の町並み・住環境の再生をめざす、まちづくりワークショップの会場として利用されるよう、町家交流サロンとして空き家を活用できるようにした。アーティストインレジデンスと町家ギャラリーの会場、まちづくりワークショップの会場、町並み調査チームの宿泊所に活用することで、「まちの活性化」に新たな可能性が開かれたように思う。

「他のまちづくりの活動とのコラボレーションを行うことで、さらなるペンキ塗りボランティアの可能性を広げていくことが可能であると考えられる。今後はこのように、他の活動と連携して行っていくことで、さらに函館のまちを活性化させると共に、歴史的町並みを維持していく力を大きくしていくことができるのではないだろうか。」とは昨年度のペンキ塗り替えボランティア隊の活動報告の一文だが、まさにそういう展開が西部地区で試みられたといえよう。成果の2番目はネットワークの拡がりである。コラボレーションとも関連するが、ペンキ塗り替え活動は、教育大学チームと子供達との交流、早稲田大や慶応大など、道内以外の学生の参加などもあった。

## ●今後の取り組みについて

函館からトラストの助成活動については、10年ほどやってきて、助成規模も拡大してきている。ニュースの発行も21号を数える。しかし、なにより、われわれの活動の拠点となる函館市西部地区は、地域の衰退と高齢化がすさまじい。行政的にはほとんど、焼け石に水程度の施策しか行われておらず、地域のまちづくり課題は深刻である。地域の再生、まちづくりに我々自身が取り組む必要性を強く認識し始めている。そういう認識はあるものの、新しい試み（町家サロン、まちづくりハウスなど）については、合意をえるのになりに議論が必要であった。とくにまちづくり実践については、従来の市民運動的側面を越えて、事業としての取り組みとなるため、函館からトラスト事務局がそのまま組織体として移行するには難しい側面があることを、今年の活動から感じた。事業体としては、新たな別組織を生み出す必要があるかもしれない。

行政側がすでに蓄えてきた地域情報を公開してもらうことを前提に、市民研究チームがその情報をさらに具体的な調査提案で活用し、住民や建築、不動産等の企業サイドと連携しながら、保存再生につながりながら事業展開にもっていける可能性はまちづくりとして、大いに意味のあることと考え、試みをおこなった

また町家サロンでの映像関係者、青森との交流、函館スローマップでは情報系の関係者との交流、町家再生では向島、京都など全国的なレベルでの情報交流の拡がりもあり、今年の活動は従来のまちづくり系から地域間、他分野など様々にネットワークが展開した年であったといえよう。

3番目は、個々の活動のなかでの成果の深化ということがあげられよう。まちづくりワークショップの開催では、空き家調査をはじめ西部地区の現況の確認から、その再生提案まで行い、改めて地区の抱えている状況をきちんと認識することができたとともに、実際のまちづくりとして進めていく場合の、事業的な課題や限界についても、ある程度状況がつかめたと考えている。

また向島や京都など、町家空き家活用の取り組みを行っている地域との調査交流では、具体的な事業方式を考え組み立てていくのに、大いに参考になった。歴史的な町家の保存再生活用を進める新たなまちづくりの仕組み（まちづくりハウスや空き家バンク）のイメージを具体的に構築することができたほか、地域再生を民間ベースでのコミュニティビジネス化していく可能性についても手がかりをえることができたように思う。

が、十分に展開できたとはいえない。従来なら、それぞれが、独自に、狭い範囲の価値判断のなかで動いて、せっかくの貴重な地域資源がいかされずに解体されているケースが多くあった。まさにそこに協働の必要性和メリットがあるわけだが、この点はまだ課題として残っている。街は生きているのだから、変わっていったって当然だ。環境改善の必要性が函館の西部地区の街並みに押し寄せている。ここがわれわれの活動の原点であるが、そういう街並みの変化はペンキを塗り替えるように、街の主役である人々の手で行われるような「まちづくり」こそ、われわれは望みなのである。そのためのまちづくり実践が切実に求められている。

現在、西部地区でのまちづくり実践をすこしでも前に進めるため、西部地区コーポラティブ住宅づくりなどの、住環境改善プログラムの展開に向けて準備を進めている。昨年度の活動はハウジングアンドコミュニティ財団、函館市まちづくり活動支援事業、北海道ろうきん社会貢献助成、日本財団の助成を受け実施された。記して感謝したい。

～日本キリスト教団函館教会～ 鐘が鳴ります！



明治10年に建築された。パイプオルガンが設置されていて、夏に開かれるコンサート、チャーチフェスティバルの会場としても市民に親しまれている。明治42年と昭和6年建築の建物の原図が6月に発見され、北大の原図展で公開された。3回類焼の憂目を見た後に建てられた現在の建物は昭和6年に火事だけでなく地震にも強い会堂として完成した。設計は萩原惇正で函館市の景観形成建築物にも指定されている。しかし鉄筋コンクリート建築とはいえ、築後73年も経っていて、今後の維持管理や耐久年数なども気になる。来年、この建物の耐震調査が行われる可能性もあり、古い建物の保存に役立つ貴重な結果が期待される。また、教会の塔屋に新たに鐘がつけられ、10月から日曜の礼拝の前に鳴らされている。ハリストス教会やカトリック教会、そして東本願寺の鐘に加わり、4つの鐘の音が祈りの地に響きわたる。

～函館スペインクラブ～ 函館西部地区2004秋のバル街(第2回)

函館の歴史と伝統のエッセンスである旧市街地＝西部地区をスペインの「バル街」に見立てて、「飲み」と「歩き」を徹底的に楽しむ試み。スペイン料理フォーラムの前夜祭として実施された今年2月の第1回は寒さにも関わらず、大好評で、再度の開催となった。参加店は37店。マップ片手にそれぞれの店の趣向をこらしたドリンク+ピンチョー(つまみ)を味わい、坂道や建物などの夜の景観を楽しみながら、充

実した大人の夜を過ごした。ふだんは会計が気になり、なかなか入りにくいお店も、チケット1枚をもぎってもらっただけ。5枚綴り3,000円のチケットはあっという間に使い切ってしまった。なお当日は市電も10時38分まで延長運転。今年6月のスペイン倶楽部主催の「初夏のお祭り」も盛況で、ここ西部地区にスペインの風が吹きまわった1年だった。



左：10月のバル街ポスター。写真提供：加納諄治  
右：2月のバル街スナップ。カウンターからポーズをとるお客、マップを眺めながら次の店を相談するお客など皆さん思いっきり楽しんでいます。  
写真提供：スタジオウェブ 穂積明弘

## 第12回助成活動募集のお知らせ

### ■募集内容

函館のまちづくりに関わる市民レベルの様々な活動や研究、企画。応募資格は函館市民に限りません。

### ■応募期間

平成16年12月1日～17年1月31日

### ■審査方法

公益信託函館色彩まちづくり基金運営委員会による審査を行い、その結果をふまえて住友信託銀行が決定します。

### ■運営委員

- ◎ 荏澤 憲吉 (函館工業高等専門学校環境都市工学科教授)
- ◎ 中尾 繁 (北海道大学大学院水産科学研究科教授)
- ◎ 加納 諄治 (編集室Kano)
- ◎ 角 幸博 (北海道大学大学院工学研究科教授)
- ◎ 野々宮 勇 (函館市都市建設部長)
- ◎ 小澤 武 (建築家・小澤建築研究室)
- ◎ 二本柳 慶一 (株)二本柳慶一建築研究所)
- ◎ 腰山 みゆき (オフィス NORD)
- ◎ 佐々木 貴子 (北海道教育大学教育学部函館校 家政教育講座助教授)

### ■審査発表

応募者全員に通知。「から」23号でも発表します。

### ■助成金額

原則として1件あたり10万～100万まで。

### ■活動報告

助成を受けた活動は平成17年の8月に活動の中間報告と平成18年の3月の最終報告をお願いします。

### ■基金委託者

(株)住友信託銀行札幌支店  
〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目3  
Tel: 011-251-2171

### ■応募用紙請求・応募宛先

函館からトラスト事務局  
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15  
Tel: 0138-52-8411 日昇商事内  
〒064-0915 札幌市中央区南15条西17丁目4-30  
Tel: 011-513-0977 プラハまちづくりセンター

## がんばりました！ 2004ペンキ塗りボランティア隊



**参加して** 2日間参加し、いつも眺めているだけの古い家屋をきれいにするお手伝いが出来たのはとても新鮮で楽しいことでした。参加した私自身リフレッシュできました。 俵谷奈美江（小樽より）

から第22号 発行：函館からトラスト事務局 発行年月日：2004年10月20日 編集：河内昌子  
〒064-0915 札幌市中央区南15条西17丁目4-30 Tel: 011-513-0977 プラハまちづくりセンター  
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15 Tel: 0138-52-8411 日昇商事内  
からトラスト公式ホームページ：<http://www6.plala.or.jp/Praha/kara/>